
~ ポケモン不思議のダンジョン・ギルド対決！！プクリンギルドVS アバゴーラギルド ~

ノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜ポケモン不思議のダンジョン・ギルド対決！！プクリンギルド VS アバゴーラギルド〜

【Nコード】

N7354X

【作者名】

ノア

【あらすじ】

世界が救われてから、5年の月日が流れていた…。リオンとピカリは、平和な日々を送っていた。そんなある日、ペラップから呼び出しが来た。それは海を越えた所にあるという「イッシュ地方」の存在とそこに住む、二匹が見たことがないポケモン達がやって来るとのことだった！そして、探検隊同士でギルド対決することに…。

イッシュのポケモン達が登場するポケダン空のオリジナルアフター
ストーリー!!

登場人物紹介（前書き）

はじめまして、ノアと申します。
初投稿です。

まずはこちらをご覧ください！

登場人物紹介

リオン（ルカリオ）

元人間。ポケダングズのリーダー。困った人を見ると放っておけない性格。勇気と優しさがあるが、よく無茶をする。よく波導を使って相手のことを読む。5年前まで“リオル”だった。

ピカリ（ライチュウ）

ポケダングズの副リーダーでリオンのパートナー。明るく、リオン同様、困った人を見ると放っておけない性格。よく無茶をするリオンのことを心配するが、ピカリ自身も無茶することがある。5年前まで“ピカチュウ”だった。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

小説初書きですので、変な所があるかもしれませんが……。

暇つぶしになってくれると幸いです。

プロローグ

ザァ　　、ザァ

ここは、波の音が1日中流れている“サメハダ岩”

そのサメハダ岩の口の中で、二匹のポケモンの声が聞こえてくる。

その声の一つは、少し低めの男声。もう一つは、ハキハキとした女声だった。

女声のポケモンは、男声のポケモンを急かすようにこう言った。

「ねえ。早く行こうよリオン！」

“リオン”と呼ばれたポケモンは、

「もうちょっとだから待ってよピカリ！」

と、女声のポケモンのことを“ピカリ”と呼び、少々、怒りと焦りのこもった声で言った。

〈五分後〉

サメハダ岩の道の横にある穴から、リオンとピカリが出てきた。

リオンは青・黒・白色の体毛で、胸部の真ん中と手の外側にあるトゲと頭の後ろにある四つの房が特徴の“ルカリオ”という種族のポケモン。ピカリは全体がオレンジ色で、葉っぱに似た形の耳と長い尻尾の先がまるで稲妻のような形をしているのが特徴の“ライチュウ”という種族のポケモンだ。

この二匹は、かつて五年前に起きた世界の危機をなんと二度も救ってくれた探検隊。“ポケダズ”なのだ。当時の彼らはまだ、“リオル”、“ピカチュウ”という進化前の種族のポケモンだった。

そして、世界の平和が守られてから半年後、二匹は“光の泉”に行き、現在の姿へと変わったのだ。

「ペラップとプクリンが待っているんだから急ぐよ。」

と、ピカリは走りながら言った。

リオンはピカリの言葉に頷き、

「よし、ギルドまでダッシュで競争だ！」

と、いうと同時に走る速度を上げてピカリを抜かした。

それを見てピカリは、

「遊んでる場合じゃないんだから!!」

と、怒りながらも、ピカリも速度を上げてリオンを追った。

「この方が早く行けるだろ!!」

と、言った後リオンは無口になり、走ることに集中した。ピカリも続いて無口にはなったが、

「（ホント相変わらずね。。。）」

と、一瞬だけ呟いてから、走ることに集中した。

二匹はそのままトレジャータウンを抜けて、“プクリンのギルド”
へと向かって行った。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？

ポケモンの特徴をとらえて書くのが難しかったです（汗）

次回をお楽しみに

遠い地方の存在

「イツシュ地方？」

「そうだ」

リオンとピカリの問いにペラップが答えた。

「実は、私達が住む地方以外に、“イツシュ地方”という所が海を越えた所にあつてね。そこには私達が見たことがないポケモン達が暮らしているんだよ」

『俺（私）達が見たことがないポケモン！！？』

リオンとピカリ、そしてギルドの弟子達全員が驚いた。

リオンとピカリがプクリンのギルドに到着し、急いでギルドの地下3階まで降りた所、そこにはギルドの親方プクリンと、その一番弟子でパートナーのペラップはもちろん、キマワリとチリーン、ドゴーム、ハイガニ、グレッグル、デイグダ、ダグトリオ、そしてビードルと、ギルドの弟子達全員が二匹のことを待っていたのだ。

「待っていたでゲス。」

ビードルは、ポケダンスが世界を救った後まではまだ“ビツパ”だった。半人前の彼は、その後もギルドの修業を頑張り、経験を重ねていった結果、今ではギルドのみんなに見直される程にまで成長していた。そして、リオン達とあまり変わらない時期に、彼も“光の

泉”に行き、ビードルに進化したのだ。

「海を越えた所に別の地方があったことだけでも驚きなのに、私達
が会ったことがないポケモン達がいるなんて、もつと驚きですわ
！キヤ　　！！」

キマワリがいつも以上に興奮しながら言った。もちろん興奮したの
は彼女だけではない。

「ヘイ、ヘイ！会ってみたいぜ！！」

「どんなポケモン達なんでゲスかね！？」

ヘイガニとビードルもキマワリに続いて言った。他の弟子達も、興
奮しながら同じ話をしていた。
それを見てペラップは、

「全員静粛に！！まだ話は終わってない！！！」

と、怒鳴り声をあげた。

その声を聞いて、全員が静まらないわけがなかった。

「全く！…まあ、これを聞いたらまた騒ぐかもしれないが…」

と言った後、ペラップはいつもの調子で話を続けた。

「実は、十年くらい前から、イツシュの者達が私達の地方まで渡る
ための船を作っていてね」

「船を…十年前から!？」と、ピカリが思わず口を開いてしまい、それからすぐに口を両手でふさいだ。
ペラップは、それを気にせずには答えてくれた。

「ああ。その方達も私達会いたかったんだろう。そしてついに、その船が完成したんだ」

『!?!』

全員がそれを聞いて一瞬ざわめいたが、ペラップの怒鳴り声を思い出し、すぐにまた静かになった。それを見て、ペラップは「よし」という風に首を縦に振って話を続けた。

「今日、その方達から手紙が来てね」

「それってもしかして…!」

リオンが全員を代表してペラップに聞いた。そして、その予想は的中した。

「ああ 一週間後くらいに、こちらに来るそうだ」

と、これを聞いて騒がないポケモンが一匹もいなかったことは言うまでもない。

ペラップも、さすがにこれは仕方がないと思った。しかし、「まだ話があるぞ」とポケモン達を落ち着かせ、話の続きを始めた。

「来るのは観光客だけじゃないぞ その地方で活動する探検隊ギルド。 “アバゴーラのギルド” の方達も来ることになったんだ」

「アバゴーラのギルド?」

ピカリは頭の上に？マークを浮かべた。

「我々プクリンのギルドと同じくらい有名なギルドだ その弟子の探検隊だけでなく、その親方、アバゴーラ親方様も来るそうだ」

「それは会うのが楽しみになった！」

ペラップの話を聞いて、ドゴームはワクワクしながら言った。

「これから、トレジャータウンのポケモン達にもこのことを伝える。お前達も、プクリンのギルドの名に恥じないよう、イツシユのポケモン達と仲良くやってくれよ」

「いっぱい仲良くしようね 友達！！友達！！」

と、ここでプクリンがここにいてからようやく言葉を発した。それまではペラップを除いて、誰もがプクリンの存在をすっかり忘れていた。それもそのはず。

プクリンは、ついさっきまで、“目を開けたまま”眠っていたのだから

『はい……』

ギルドのポケモン達は、二匹の言葉に返事をした。

「それじゃ、みんな 仕事に戻ってくれ」

ペラップがそう言つと、ギルドの弟子達は自分の仕事に戻つていった。

リオンとピカリも今日の仕事を決めようと、地下2階の掲示板に向かつていた。

「あゝ一週間後が楽しみ」

ピカリはまだ、ワクワクが止まらないでいた。

「話を聞くとつまり、イツシユのポケモン達にとつても、俺達は見ることがないポケモンってことか…」

「じゃあ、お互いにワクワクね」

リオンの言葉にピカリはますます興奮した。

そんなピカリを見て、リオンはその笑顔にほほえみながら言った。

「でもそれまでは、しっかり仕事をこなさないとな！」

「そうね！」

ピカリは元気に頷いた。

そして依頼を決めた二匹は、ギルドを後にした。

遠い地方の存在（後書き）

いかがでしたか？

次回をお楽しみ！

前夜〜リオンとピカリ〜

あれから六日後　。
いよいよイツシユのポケモン達がやって来る一週間後が、明日に迫っていた　。

その日の夜

リオンとピカリは自分の寢床につき、寝ようとしていた。
この日、二つのお尋ね者依頼と一つの救助依頼をやり遂げてくれたになった二匹は、待ちに待った日が明日なのもあり、早く寝付こうとしていた。

しかし、　　楽しみの前夜はなかなか眠れないものだ
早く寝ようにも寝付けないのだ。

「リオン。まだ起きてる？」

ピカリはそつとリオンに話しかけた。
しかし、リオンは目を閉じており、ピカリの声に反応していないようだった。

「寝っちゃったんだね……。」

と、少し残念に呟いた後、ピカリはリオンの寝顔をじっと見つめた。

「（昔は可愛かったなあ……。）」

ピカリは、今のリオンとリオルだった時の頃と比較して思った。

リオルの時は、よく可愛らしい寝顔を毎夜必ず見ていたが、ルカリオになってからは、あまり見ていないことにピカリは気づいた。今のリオンの寝顔も可愛らしく思うが、リオルの頃と比べると、やはり進化前の方がいい。ピカリがそんなことを考えていたら、

「男に「可愛い」言うな！」

「！！」

リオンは閉じていた目を開け、ピカリに怒りながら言った。よく見ると、元々の青い顔が少し赤くなっている。そう、リオンも、実はまだ起きていたのだ。リオンが急に声を発したため、ピカリは驚いてビククリしてしまった。その後リオンを睨み付けて、

「ビククリしたじゃない！！起きていたんだったら返事してよ！」

ピカリはリオンよりも怒りのこもった口調で怒った。

「あつ…ごめん！驚かすつもりじゃなかったんだ…。」

リオンはすぐにピカリに謝った。しかし、ピカリが怒った原因はそれだけではない。

「それから、勝手に人の心を読まないでよ！！」

ピカリは顔を赤らめながら言った。さっきまで思っていたことを全て聞かれて怒らないポケモンなど、いるはずがない。しかも、聞かれた相手のことだから余計に恥ずかしかった…。

リオンは、ピカリの今にも泣きそうな顔を見て、本当に悪い事をしてしまったと反省した。

「ごめん…。俺もピカリと同じく眠れなかったから…波導でまだ起きていいのか確かめようとしたら、ピカリが話しかけてきて……」

リオンはピカリにもう一度謝った後、何故あの時返事を返さなかったのか、理由を説明した。聞けば、いきなり話しかけてきたため、驚いて返事をするのを忘れていたらしく、しかも、波導を読みとろうと目を閉じていたので、ピカリには眠ってしまったのだと誤解され、話しかけることが出来なくなってしまったようだ。ピカリが話しかけた後何も喋らなくなったので、波導で調べると…自分の寝顔が可愛いかったなどと言っていたのが聞こえてきたではないか。リオンは恥ずかしくなり、ついにピカリに話しかけてしまったらしかった。

ピカリはこの説明を聞いて、

「…じゃあ、私が誤解したのが悪かったわね……ごめんね…」

と、ピカリはリオンに謝った。リオンはこれを聞いて、「そんな事はない」と慌てた口振りで、

「いや、俺がすぐに「起きてるよ」って言えば済む話だったんだ。ピカリが謝る必要はない。」

といい、いつまでも気まずいのは嫌だったため、話を変えた。

「ところで、あの時何の話をしようとしてたの？」

「明日のことについて話したかったんだけど…」

リオンの問いに答えていた途中、ピカリが

「ふわぁぁ……」

つと、大きなあくびをした。

「……ごめん。なんか怒ったりなんだりしたら、疲れて眠くなっちゃった……。」

ピカリは申し訳なさそうに言った。リオンも、

「ああ……俺も何だか眠くなった……もう遅いから寝よう。その話は明日でもできる。」

と言った後、ピカリのがうつったのか、リオンも続けて大きなあくびをした。

ピカリはリオンの言葉に頷き、一匹はそのまま、眠りにおちていった。

前夜〜リオンとピカリ〜（後書き）

……なんか、イツシユのポケモン達のことについて話をするポケダ
ンズを書こうとしていたはずが…書いている内にこんな感じになっ
ちやいました。（汗）

次回は別の前夜をお送りします。お楽しみに！

前夜（プクリンギルド）（前書き）

お待たせしました。

前夜。プクリンギルド編です。

今回はいつもより長めです。

前夜くプクリンギルドく

チリン、チリーン。

「みなさーん。食事の準備が出来ましたよー。」

チリーンがベルを鳴らして、ギルドのポケモン達に言った。ギルドのポケモン達は、待ってましたとばかりに食堂に向かった。

く三十分後く

いつもなら、食べ終わったらすぐに寝床につくギルドのポケモン達だが、この日に限っては、全員で明日のことについて話の花を咲かせていた。

「親方様。明日のいつ頃に到着する予定なのですか？」

ペラップがプクリンに問う。

「今日、ペリッパの速達で手紙が来てね　お昼前には到着する予定らしいよ　」

「いよいよ明日だな。」

「楽しみでゲス！」

「今夜眠れますかね、父さん。」

「そつだなあ……。」「

「ヘイ、ヘイ！待ち遠しいぜー！！」

「本当ですね！キヤッ」

「キヤーー楽しみですわー！！」

「グへ。グへへへへ！」

ギルドのポケモン達はとても楽しみでしようがないようだ。グレッグルは何が言いたいのかは分からないが…。

「うん アバゴーラもすぐみんなに会うことを楽しみにしてるって手紙に書いてたよ」

プクリンが言ったその言葉を聞いて、

「えっ。アバゴーラ親方様からの手紙だったんですか？」

キマワリは確認するようにプクリンに聞いた。

「うん」

「実は、親方様とアバゴーラ親方様は、今日まで手紙のやり取りをしていたんだ。」

プクリンが軽く返事をした後、ペラップが詳しく説明してくれた。

「あの時の手紙は二つあったんだ 一つは観光客の代表。もう一つはアバゴーラ親方様からの手紙だったんだ」

「そうだったんでゲスカー。」

ビーダルが納得して頷いた。

「返事を書いたらアバゴーラから、『先に親方同士で語りませんか？』って返事が来たんだ。だから、今日まで色んなことを手紙で語ったよ。」

と、プクリンは楽しかったとみんなに言った。

「そういえば親方様。アバゴーラ親方様ってどんなお方なんです？」

と、ペラップがプクリンに質問をした。どうやらペラップも、どんなやり取りをしていたのかわからないようだった。ギルドの弟子達も「聞きたい、聞きたい」と言ってきたので、プクリンは、

「アバゴーラは水、岩タイプのポケモンなんだって。後は、けっこうなお年寄りってことぐらいかな？手紙のやり取りだから…。」

と、答えた。確かに、手紙のやり取りだけでは情報は限られる。それでも弟子達は、

「水タイプか……俺みたいにハサミとか付いてるのかな？」

「ハサミじゃ手紙が書きづらくないか？」

「そういえばハイガニって、文字書けるんでゲスカ？」

「書けるに決まってるだろ！」

「岩タイプも持っているのですから…古代ポケモン類なんですかね？」

「その可能性は高いな…。」

などと、いろいろとアバゴーラの姿を想像していた。

「親方様。アバゴーラ親方様は、自分の弟子について何か書いていましたか？」

チリーンがプクリンに別の質問をした。

それを聞いて他の弟子達も頷いた。が、

「残念だけど、そのことについてはお互いに会ってからの楽しみってことにしてるから…僕も知らないんだ。」

と、プクリンは申し訳なく答えた。しかし、それからあることを思い出した。

「あっ！確か…ポケダングスのようにギルドを卒業した探検隊がいるってことは言ってたよ…毎度困った三匹だっただけぐらいしか教えてくれなかったけど…」

『へえー。』

弟子達は興味をもち、

「毎度困った三匹？」

「どんなポケモンでしょうね？」

「また楽しみが増えたな……」

などと、またいろいろと想像の会話を始めていた

食事が終わってから一時間以上も話してしまったため、ペラップが

「そろそろお開きにしよう」

といい、弟子達は自分の部屋に戻っていった。

くプリンの部屋く

プリンは、アバゴーラに手紙を書いていた。

『アバゴーラ。僕のギルドにも卒業した探検隊がいるんだよ。仲良しの二匹だよ。例の件については、明日ゆっくり話そうね。それじゃ、明日ね。おやすみ。友達！プリンより』

プリンは書き終えた手紙を封筒に入れ、部屋の窓まで持っていった。そして、窓を開けると……

「待たせてごめんね。これをアバゴーラに……」

「いえいえ、大丈夫ですよ。待つことも仕事ですから。」

大きな口と帽子のような頭の形をしている“ペリッパー”というポケモンは、プクリンの手紙を受け取り、持っているバツクにしまいながら言った。

「速達ですよ。では、しっかりお届けさせていただきます。」
「と」と同時に、

バサツ、バサツ

ペリッパーは海に向かって飛んでいった。

ペリッパーを見送った後、

「さてと。僕も早く寝よ」

プクリンは窓を閉め、自分の寝床に横になると…

「ぐうー……。」

と、たった三秒で眠りについた。

前夜くブクリンギルドく（後書き）

いかがでしたか？

次回の投稿は、しばらく修学旅行やら期末テストやらで多忙になるため遅くなります。

今月中には投稿できるように頑張ります！

ちなみに次回はまたまた前夜です。この流れだと次は誰の前夜かも予想がつきますよね（笑）

お楽しみに！

前夜くアバゴラギルドの船く前編(前書き)

お待たせしました。

テストが終わってからだと12月に投稿することになってしまっ
で、今日投稿することになりました。修学旅行沖縄楽しかったです！
今回はかなり長文になったので、前編・後編で分けましたf^_^
それでは前編をどうぞ！

前夜くアバゴラギルドの船く前編

サアー。サアー……

リオン達が住む「シンオウ地方」から遠く離れた海の向こうに、二つの船があった。

一つは、約二百匹のポケモンが乗れるほどの大きな船だった。そこにはシンオウ地方を観光する、イツシュのポケモン達が乗っていた。

明日の観光が楽しみでしょうがないポケモン達

子供の方は今から興奮しているため、なかなか眠ってくれない。しかし、大人の方も同じで、数匹のポケモンは船の甲板で夜空を眺めていた……

もう一つの船は、さっきの船と比べるとかなり小さく見え、三十匹のポケモンが乗れるくらいだった。この船に、アバゴラギルドのポケモン達が乗っていた。そのアバゴラギルドの船に、一匹の鳥ポケモンが近づいてきた。

ペリッパーだ

ペリッパーは、アバゴラギルドの船の甲板に向かった。その甲板に行くと、一匹のポケモンが甲板の真ん中に立っていた。そのポケモンは二足立ちした亀のような姿をしており、岩でできた甲羅の部分は、まるで堅いよろいを着ているようだった。

ペリッパーはそのポケモンを見つけると、すぐにそのポケモンの前

まで飛んでいき、着地すると、

「アバゴーラさん。プクリンさんからのお手紙です。」

と、そのポケモンの名を呼び、プクリンの手紙をバックから取り出し、前に差し出した。

「おお。こんな夜遅くにすまないねえ。ありがとう。」

そのポケモン　アバゴーラはペリッパーにお詫びと感謝の言葉を並べた後、前に出された手紙を受け取った。

「いえ、いつも当たり前に行っていることですから。お手紙はきちんとお渡ししました。それでは……」

バサツ、バサツ

ペリッパーは翼を広げ、アバゴーラギルドの船を後にし、飛んでいた。

「どれどれ……」

アバゴーラが封筒を開けて手紙を読もうとした。その時、

「親方様。」

と、翼を持つポケモンがアバゴーラに話しかけてきた。そのポケモン、よく見ると腕から翼が生えていた。腕の先にはちゃんと手があり、その手には鋭い爪もあった。体毛はふさふさとした感じで、顔立ちを見るとまるで恐竜のよう……いや、総合的に見てかもしれな

い。

「おおっアーケオス。」

アバゴーラがそのポケモンの名を呼んだ。

「こんな時間に何をしてるんですか？あまり夜更かしてはお体にさわります。」

アーケオスは、年取ったアバゴーラの体のことを心配しながら彼の所まで飛び、隣に着地した。並んで見ると、アーケオスはアバゴーラよりも少し背が高かった。歳もアバゴーラよりずっと若く、逆にアバゴーラはかなりの歳をとっていた。とても、昔イッシュ地方で知らないものがない程の有名な探検家だったことは、誰も思わないだろう。

アーケオスは、アバゴーラが開けた封筒と紙を持っていることに気がついた。

「……プクリン親方様からですか？」

「うむ。」

アバゴーラは頷いた。

「最後の手紙じゃ。いやー、あつという間だったのう。」

ほっほっほっ。

アバゴーラは老人らしく笑った。

「では、改めて……」

アバゴーラはプクリンからの手紙を読み始めた。アーケオスには見えないように……。

「ほほおー……。」

アバゴーラは手紙を読んで言葉をもらす。

「何と書かれているんですか？」

アーケオスは内容が知りたいのか、手紙を覗き込もうとした。が、

「これはワシ以外見てはならんのだ。」

アバゴーラは手紙を見せまいとアーケオスをかわした。アーケオスは何度もトライするものの、アバゴーラは見事に全てかわした。とても老人とは思えない動きだ。

「（さすが親方様……。）」

アーケオスにはこれは無理だと判断し、手紙を見ることを諦めた。しかし、少しでも知りたかったため質問を試みることにした。

「プクリン親方様はどんな方なんです？」

「手紙のやり取りだからのう……ノーマルタイプで、恐らくお前と同じくらいの歳という所じゃ。」

「そうですね……。」

アバゴーラのあまりにも情報が少ない答えに、アーケオスは心の中でがっかりした。しかし、“アーケオス”と同一年ぐらいの親方だと聞いて少し驚いた。

「弟子のことについて……。」

「残念だが、それはお互いに会ってからの楽しみじゃ。だからワシは知らんし、プクリンもお前達のことは何も知らん。」

アバゴーラはこの質問が来ることを察知していたのか、アーケオスが質問を言い終える前に答えた。

「……そうですね。」

アーケオスは「それなら仕方がない」という感じで返事をする。

「しかしお互いにギルドの卒業生がいるってことは、今日知ったぞ？」

アバゴーラは“わざと”らしく今、アーケオスにこのことを教えた。

「どんなポケモンなのか教えあつたのですか？」

アーケオスは興味を持った様子で問う。

「言ったじゃろ？会ってからの楽しみじゃと。ワシは“あいつらのことを『毎度困った三匹』としか書いておらん。プクリンの方も『仲良しの二匹』としか書いておらんかった。」

アバゴーラは正直に、手紙に書いたことを言った。それを聞いてア
ーケオスは、

「それは楽しみになりましたね。では、私はお先に休みます。親方
様も早く休んで下さいね？」

といい、アバゴーラより先に船の中に戻っていった。それを見送っ
た後、アバゴーラは何故か笑いながら、こんなことを言ったのだっ
た。

「ほっほっほっ。残念じゃったのう。」

前夜くアバゴーラギルドの船く前編（後書き）

いかがでしたか？

今回は後編をお送りします。

投稿は12月になります。

お楽しみに！

前夜くアバゴーラギルドの船く後編(前書き)

お待たせしました。

後編です。

どうぞ！

前夜くアバゴラギルドの船く後編

く船の中く

船の中に戻ったアーケオスは、迷わずある部屋に向かっていた。その部屋に向かう間、

「絶対わざとだ……」

と、何やら苛立ちながら歩いていた。

アバゴラギルドの船は、親方と一番弟子の部屋、他の弟子達の部屋と分かれており、親方と一番弟子　アバゴラとアーケオスは二匹で一部屋、他の弟子達はチームごとに行くつかの部屋に分かれていた。部屋への道も、途中で二つに分かれている。右へは親方と一番弟子、左へは他の弟子達の部屋へとつながっているのだ。

アーケオスはその分かれ道で、一度足を止めた。

「……………」

そしてその道を“右”へ曲がる、はずなのだが……何故か……“左”の方に曲がっていった。

アーケオスは左へ曲がって少し歩いていくと、急にピタツと足を止めた。それから一度後ろを向き、誰もいないことを確認すると、

ぴよんっ

と跳び上がったと思うと、そのまま

くるっ

と、紫色の光を放ちながら回った。そして、再び船の廊下に足がついた時には、そこにはアーケオスよりも背が高く、長い鬘を生やしたポケモンが立っていた。 “本物”のアーケオスではなかったのだ。

鬘のポケモンは本来の姿に戻ると再び歩き出した。進んだ先には、沢山の部屋の扉が並んでいた。鬘のポケモンはさらに奥に進み、一番奥の右側の部屋のドアノブに手をかけ、

ギイツ

と扉を開け、部屋の中に入った。その部屋には、残りの弟子達が鬘のポケモンの帰りを待っていた。

「どうだったの？」

紫色の炎をゆらゆらと揺らしているポケモンが鬘のポケモンに尋ねた。しかし、その答えを聞く前に、

「どうしたの？そんなにイライラして……」

手に、まるでムチのように長い体毛を垂らしており、顔に黄色いひげが二本生えているポケモンが、鬘のポケモンの様子を気にして声をかけた。他のポケモン達も最初にそっちの方を気にしていた。

「親方め……僕だと分かっているが……」

鬣のポケモンは怒りのこもった口調で呟くように言っている。

「なんだ？すぐバレたのか？でもお前、いつもならそれだけじゃ怒らねえよな……？」

目の周りの黒ぶちがまるでサングラスの形をしているポケモンが鬣のポケモンに問う。すると、

「それだけじゃないから怒ってんだよ！！」

ブンツ バシンツ

「ふぎやつ！！」

ダンツ

鬣のポケモンは自分の鬣を頭で振るい、サングラスのポケモンに思いつきりぶつけた。サングラスのポケモンはそのまま吹っ飛び、壁にぶつかった。そして、ぶつけられた顔を手でおさえながら、

「いってえ……このやろう！！」

サングラスのポケモンは鋭い爪を構えて、鬣のポケモンに早足で近づこうとした。が、

「おい、やめろ！！てめえが暴れると船が壊れるだろうが！！！」
赤色と紺色の大きな翼を持ったポケモンが、その翼で、サングラスのポケモンの頭をバシンと叩いた。そして、サングラスのポケモンにまるで脅迫するような目で睨みつけながらこう言った。

「海に落ちたら……お前、死ぬぞ？」

「うっ……」

サングラスのポケモンは何も言い返せなくなった。どうやら水が苦手なようだ。

大きな翼のポケモンは、サングラスのポケモンを静めた後一つため息をつき、

「お前も、俺の相棒でストレス発散するなよな……」

と、鬣のポケモンに呆れながら言った。しかし、鬣のポケモンは全く聞いていないらしく、こんなことを言っていたのだった。

「あースッキリした！」

〈五分後〉

全員が落ち着いた所で、鬣のポケモンは今日の収穫をみんなに報告する。

「残念だけど、親方も“あっち”のポケモン達のことについては何も知らないみたい。プクリン親方様についても……ノーマルタイプでアーケオスと同じくらいの年齢ってことぐらいしか分からなかったよ。」

「そうか……」

「若い親方様なのですね。」

「弟子についても少し知りたかったなあ……」

「でも、明日になれば会えるんだからいいんじゃない？」

「今夜眠れるかな……」

「子供ね。」

「なんだと!？」

「まあまあ、二匹共……」

「ケンカはだめですよ。」

「カツコイイ子いるかな？」

「君はそればかりだね……」

弟子達は情報があまりなかったことにはっきりしたが、「明日になればいい話」だと考えればいいと思っていた。その時、鬘のポケモンが、

あっ

と少し口を開けて、最後に親方が言っていたことを思い出した。

「どうしたの?」

「いつけない。忘れる所だった。」

紫炎のポケモンの問いに、鬘のポケモンは思い出したことをみんなに言った。

「プクリンギルドにも、僕達と同じように卒業した弟子が二匹いるってことを親方が言ってたよ。」

「他には？」

鬘のポケモンの言葉に、黄色いひげのポケモンはすぐにその事に興味を持って問う。

「プクリン親方様は『仲良しの二匹』としか書いてなかったみたい。」

「やっぱりそれぐらいしか教えないか……」

黄色いひげのポケモンは自分の手にアゴを置きながら言った。

「親方様も私達のことを書いたの？」

紫炎のポケモンの問いに、鬘のポケモンは待つてましたとばかりに、

「何て言ったと思う？」

と、紫炎と黄色いひげの二匹に逆に質問した。どうやらこの三匹が、アバゴーラギルドの卒業生のようだ。しかし質問しておきながら、鬘のポケモンは二匹の答えを待たずに答えを明かした。

「『毎度困った三匹』」

「あー……。」

黄色いひげのポケモンは何故か納得した様子で、他に言うことが思いつかないでいた。一方、紫炎のポケモンは、

「アハハ……親方様から見ればそうよね……」

と、苦笑しながら言うしかなかった。残りの弟子達も、

『確かにそうだな（ですね）……』

と、心の中で呟くのだった。

「……お前……まさかそれだけのことで俺を吹っ飛ばしたのか？……」

サングラスのポケモンが鬣のポケモンに問う。もしそうだったとしてもキレル気はなく、ただ単に理由を確認したかった。

「そこはほんのちよつとだけ。親方が、僕が“化けてる”ことに気づいていながら、わざとそれを言ったことに僕は腹を立てたんだ。バカにしてるみたいで。」

「あーそうかい……」

サングラスのポケモンはそれを聞いて呆れ返った。もしキレル気があったとしても、キレル気になれないと思ったのだった。

その後も雑談をしていた弟子達だったのだが、時間がたつにつれ、

次々と眠気に負け、自分の部屋に戻っていった。そして最後には、元々この部屋を使っていた卒業生の三匹だけとなった。

「ふわぁ……私達ももう寝ましょう。」

黄色いひげのポケモンがあくびをしながら二匹に言った。

「そうね。」

紫炎のポケモンは頷いたのだが、

「……………」

鬣のポケモンは全く何も言わず、アゴに手をあて、何やら考え事をしていた。黄色いひげのポケモンはこの時、鬣のポケモンが何を考えているのかはいつものことのため分かっていたが、一応聞いてみることにした。

「……………何考えてんの？」

「親方にどんなイタズラをしようか考えてんだよ。」

黄色いひげのポケモンの予想通りに鬣のポケモンは答えた。

「あんたねえ……そんなことだから親方にあんなこと書かれちゃうんじゃない。少しは恥に思ったら？ゾロアーク。」

「そついう君はどうなんだ？コジヨンド。」

鬣　ゾロアークは、黄色いひげ　コジヨンドの言葉に逆に質問

した。

「私は恥に思うわよ。私自身があまり困らせたことがないんだから。」

コジヨンドはゾロアークに言ってやった。そんな二匹の会話の間に、

「ねえ、私だけ仲間外れにしないでよ。」

紫炎のポケモンがふわっと入ってきた。

「シャンデラ。あなたは親方にあんなこと書かれてどう思う?」

コジヨンドは紫炎　　シャンデラに同じ質問をした。

「私は……そんなに恥ずかしく思わないわ。だってホントのことだし。コジヨンドだってイタズラに参加してるじゃない。結局。」

シャンデラの言葉に、コジヨンドは何も言い返せなくなってしまった。そもそもシャンデラに聞いた時点で無駄だと言うことを、コジヨンドは今思い出した。どちらにしろ、コジヨンドもイタズラに参加していることの事実は変わらない。コジヨンドはシャンデラの言葉を聞いて、さっきまで言っていたことが、何だかどうでもよくなってしまう。

コジヨンドは、ゾロアークにこんなことを聞き出した。

「で。親方にどんなイタズラを仕掛けるの?ゾロアーク。」

「あれえ?さっきまでイタズラすることは恥だって言ってなかった?」

ゾロアークがコジヨンドの言葉にわざとらしく驚いた。そんなゾロアークにコジヨンドは言っっちゃった。

「親方があんなことを書いたんだから、それに応えてあげるだけよ。」

「フッフ　また楽しみが増えちゃったみたい」

シャンデラはまるで、今にでもイタズラがしたくてしょうがない子供のよような満面の笑みを浮かべた。

前夜くアバゴーラギルドの船く後編（後書き）

いかがでしたか？

最後意味分らない表現がありました、そこは温かい目でみてく
れると嬉しいです。

次回をお楽しみに！

到着

ザアー―サアツ、ザアー―サア……

海の海岸には、すでにプクリンギルドのポケモン達と数匹のトレジャータウンのポケモン達が、イッシュ地方の船が見えてくることを待っていた。

「おっ！あれじゃないか!？」

トレジャータウンに住むヤルキモノが、一つの影を見つけ、その影の見える方角を指さした。

「親方様！あれですか!？」

ペラップもその影を見つけると、少し興奮した様子ですぐにプクリンに尋ねた。 もしかすると、この中で一番この日を待ちわびていたのは……ペラップなのかもしれない。
しかしその前に、

「ん?」

ヤルキモノが再び影を見た時、その隣にもう一つの影があることに気がついた。

「おい、もう一つあるぞ!！」

「二つの船……間違いないよ」

ヤルキモノの言葉を聞いて、プクリンは確信して言った。

「プクリン。船って二つもあったのか？」

「うん 一つは観光客のポケモン達。もう一つはアバゴーラギルドのポケモン達が乗っているんだよ」

リオンの問いにプクリンはいつもの調子で答えた。

「それじゃ、俺はみんなに知らせてくるわ！」

「私も、カフェにいるみなさんに伝えてきます！」

ヤルキモノと“パッチールのカフェ”の店主パッチールは、リオン達に出迎えを任せ、自分達は先にトレジャータウンに駆け足で戻っていった。

〈十分後〉

イツシュ地方の船が海岸に着こうとしていた。その時には、二つの船が大小の船であることが分かる。しかし小さい船も、十分に大きいものだった。

「さあみんな！イツシュ地方の方々をしっかりお出迎えするよ」

『おーー！』

ペラップの言葉に、リオン達は大声をだしながら片腕を空に向けて伸ばした。ギルドの朝礼で必ずやっていたことだった。しかし、リオンとピカリにとっては卒業以来久しぶりにやったため、二匹はこの瞬間がとても懐かしく感じた。

「いよいよだね！リオン。」

「ああ！」

リオンとピカリは一気に興奮してきた。一体どんなポケモン達なのか。どんな探検隊達に出会うのか。二匹はもちろん、プクリン達ももうワクワクが止まらなかった。

そして、船が岸に着き、大きい方の船から一匹のポケモンが降りてきた。

到着（後書き）

いかがでしたか？

次回をお楽しみに！！

イツシユのポケモン達(前書き)

お待たせしました。

段々更新が遅れそうでやばいです(汗)
冬休みにとっくに入ったのに、忙しい日々です(T|T)

それではどうぞ！

イツシユのポケモン達

観光客達が乗る、大きな船から一匹のポケモンが降りてきた。

そのポケモンは、全体が紺色と灰色の毛でおおわれており、体の部分が足しか見えない。鼻の下に生えるひげは、左右側だけが砂浜に引きずるほど長かった。

プクリンとペラップが、そのポケモンの前に出る。

「観光客代表の“ムーランド”さんですね？初めまして、一番弟子のペラップと申します。そしてこちらが、我らの親方、プクリン親方様です」

「初めまして 僕がプクリンだよ」

「後ろにいる者は弟子達です」

『イツシユ地方のみなさん、シンオウ地方へようこそ！』

弟子達は、ペラップの言葉に続いて、イツシユのポケモン達に元気よく歓迎の言葉を送った。 実は、もうムーランドが降りた後から、次々と他のポケモン達も船から降りていたのだ。そのため、挨拶はムーランドだけではなく、全体に挨拶をする形になった。

ムーランドは、プクリンギルドのポケモン達の元気の良い挨拶に一瞬びっくりしたが、すぐに元の優しそうな顔に戻った。

「いやあ〜どこに行っても、ギルドのポケモンさん達は元気がよろしいのですな」

ムーランドはニコリと笑い、プクリンギルドの弟子達に感心する。

その後初めて見る他地方のポケモンをじっくりと見ようとすると、自分の自己紹介がまだだったことを思い出した。

「あ……失礼。自己紹介がまだでしたな。私がムーランド。代表として、手紙を書かせていただきました。このような温かいお出迎え、ありがとうございます」

ムーランドがペコリと頭を下げながら言う。

「いえいえ！こんな遠い所、はるばる来て下さって……礼を言うのは私達の方ですよ！」

ペラップは、頭を下げたムーランドを見て、慌てて自分も頭を下げる。

「まあまあ二匹共。堅苦しい挨拶はそこまで」

それを見たプクリンは、二匹の会話に入るとすぐに頭を上げさせた。

「それにしても、どのポケモンも初めて見るポケモンばかりだね」

「私達から見ても、あなた方は初めて見るポケモンです。特にプクリンさん。あなたのような若いギルドの親方さんは初めてですよ」

「どうもありがとうございます」

イッシュのポケモン達にとっては、プクリンのようなギルドの親方は珍しいようだ。しかし、それはシンオウも同じで、あの若さでギルドの親方になったポケモンはプクリンだけなのだ。そのため、プ

クリンはたくさんのポケモン達のあこがれの存在だった。

一方リオン達は、イツシユのポケモン達をまじまじと見ていた。

「（わぁー）」

「（本当に、見たことないポケモンばかりだ……）」

かっこいいポケモン、かわいいポケモン、変わったポケモン、強そうなおポケモン……どれもリオン達が見たことがない、ポケモン達だった。

ピカリは、初めて見るポケモン達に、目をキラキラと輝かせていた。一方リオンは、ピカリの輝きすぎる顔を見ておもわず笑ってしまう。

「ピカリ……目の輝きがハンパないぞ？」

「いいじゃない。あっちも私達のことずっと見てるんだから」

ピカリは視線をそらさないまま言い返えす。もう、イツシユのポケモン達しか目に入らないようだった。たしかに、リオンもじっと見られていることは、言われなくても分かっていた。しかし、それよりも気になっていることがあったのだ。

「（それにしても……アバゴーラギルドのポケモン達が“まだ”出てこないな……どうしたんだ……？）」

リオンは、アバゴーラギルドのポケモン達が乗る船から、まだ誰も出てこないことに疑問を持っていた。船からポケモン達が降りた時、リオンは、最初にギルドのポケモン達を見ようとした。しかし、まだ誰も船から降りていなかったのだ。まだ降りる準備ができ

ていないのかと思ったリオンは、先に観光客のポケモン達を見ることにした。そして、一通り見終わった後、再び船の方を見たが、いまだに誰も出てきていないようだった。

「（さすがに遅いな……それに、やっぱり……）」

よく考えれば、まだ降りる準備ができていない時点でおかしいとリオンは気がついた。船での移動なのだから、準備する時間は十分にある。それに、誰だっこのう時はすぐに降りられるように早めに準備をすませるはずなのだ。現に、ムーランドを除いたポケモン達も、彼が降りた後すぐに続いて降りている。あやしく思ったりリオンは、ムーランドに尋ねてみることにした。

「ムーランドさん。アバゴラギルドのポケモン達がまだ出てこないようですが……」

「へ？あ、あなたは？……」

リオンがいきなり話しかけてきたため、ムーランドはおもわず変な声を出した。

「おいリオン！ いきなり話しかけては失礼じゃないか。ちゃんと名乗ってからにしろ！」

それを見たペラップはリオンを叱った。リオンはできれば急ぎたかったのだが、仕方なく自分の名を言うことにする。

「……リオンといいます。リオンは名前で、種族の名はルカリオといます」

「ああ……どうも」

「リオーン。どうしたの？」

ピカリは、やっとリオーンが近くにいないことに気づき、リオーンのはまで寄ってきた。その後リオーンは、二匹に自分の疑問を話し始める。

リオーンの話が終わると、ムーランドはアバゴーラギルドの船に目をやった。

「たしかに、誰も降りてこない……おかしいですな……？」

「どうしたんだらう……？」

「リオーン、怒って悪かったな。私もまったく気がつかなかった……」

「いいさ。俺もいきなりで礼儀が悪かったし」

「それにしても、どうしたんだ？」

「一番弟子のアーケオスさんも出てこないなんて変ですよ。まさか、アバゴーラさんに何かあったんじゃない……」

「いや、そうだとしても静かすぎるよ」

ブックリンはまじめな顔になり、ムーランドの言葉を否定する。そして、リオーンにあることを尋ねる。

「リオーン。本当にみんな船の中にいるの？」

「最初に気づいた時に調べたが、十五匹以上の波導を感じた。特に、変わった様子はなかったけど……」

「そう……」

プクリンはそれを聞いて安心する。本当に何かあったのではないかと心配していたのだろう。しかし、いまだに出てこないことへの疑問はまだ解決していない。

プクリンは少し考える顔になった。すると、たちまち何か思いついたような顔になると、すぐにリオンの方に顔を向けてこう指示した。

「リオン。ピカリと一緒に、直接アバゴーラ達を出迎えてあげて」

「……分かった（わ）」

二匹はプクリンの指示に承知する。思えば、このようにプクリンにたのまれることも、卒業以来だった。懐かしい感覚を感じながら、二匹は目的の船に向かった。そして、船の前に立ち、リオンはピカリの手を握ると、いつもの口癖のようにこう言った。

「手をはなすなよ？」

「分かってるわよ」

ピカリは少しムキになった様子で返事を返した。
リオンはそれを聞くと、

「いくぞー！」

というと同時に、船に向かってジャンプした。それから、船の壁を
つたって三回ジャンプをし、二匹は船の甲板に同時に着地した。

イツシユのポケモン達(後書き)

いかがでしたか？

次回は今回より遅くならないよう頑張ります！

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7354x/>

～ポケモン不思議のダンジョン・ギルド対決！！プクリンギルドVSアバゴー

2011年12月23日23時49分発行